地域医療を担うドクター

医療法人　青仁会
池田病院

医療法人青仁会 池田病院
院長　池田　大輔 先生

鹿児島県大隅半島の中心部に位置する鹿屋市に開業して６０年目を迎える医療法人青仁会池田病院（以降池田病院と表記）がある。池田病院はここ６年間でそれまでの診療体制を刷新し地域住民の医療ニーズに幅広く対応している。今回、池田病院の院長池田大輔先生に病院の経営改革と地域医療への取組みについてお話を伺った。

新たな診療体制の構築
自らリクルートに動く

「平成２２年、私は勤務医を辞めて当院へ戻って来ました。それまでの池田病院は透析治療を担う医師達の努力によって透析施設としては有名でした。しかし病院の診療体制としては典型的な老人病院だったと思います。私は戻る前から当院の診療体制はこのままで良いのだろうか？果たして地域住民が求めている医療が提供できているのだろうか？と当時の診療体制に懸念を抱き続けていました。そしてこのままでは地域住民の医療に対するニーズには充分応えきれないし、将来的にも厚生労働省が進める地域包括ケアには到底対応できないと考えました。私は、鹿屋市という地方都市で池田病院を生き残る病院に改革するにはどうしたら良いのかと模索しました。当時、医業経営を行う上で参考になると思った病院には、例え遠方であっても見学に行きました。」

「これまでの池田病院の強みを活かし地域住民の医療ニーズに幅広く対応するには“患者さんの様々な血管の病変に対応できるＩＶＲ（血管内治療）を主体とした診療体制を構築する”こと。それが私の出した結論でした。当然病院を改革するには環境的にも人的にもかなりの投資が必要となります。私は池田病院の将来構想にはＩＶＲを行うことが不可欠だということを理事長（父）に提案しました。理事長はそれだけの診療体制を築く必要性があるのかと最初こそ反対しましたが、最終的に地域住民の役に立つのであればと私の考えに賛同してくれました。理事長は“私が池田病院の将来に対してどれほど責任を持って取組むのか”という経営者としての覚悟を判断したのだと思います。」

医療法人青仁会 池田病院
理事長　池田　徹 先生

「それから間もなくして血管撮影室を造ることから始めました。それと同時に私は当院のＩＶＲ診療を将来的に支えてくれると思う医師には自ら出向き、自分の考えやこれからの池田病院の方向性を伝え、私達と一緒に地域医療を担ってくれるように働きかけました。その医師というのが現在のＩＶＲセンター長である宮川勝也先生であり、もう一人の先生が当院で脳血管内治療を行っている脳神経外科の富士川浩祥先生です。両先生とも私が求めていた以上の診療を行っていると思います。」

隠れた疾患への対応
患者さんのＱＯＬ向上

新たな診療体制を築いた池田病院には他の医療機関からの紹介が劇的に増えているという。

「病気を治すことは当然求められることですが“病気の発見がもう少し早ければ手遅れにならずに済んだのに”という悲劇を少しでも減らすことも私達の大切な使命だと思います。当院では脳・心臓・肝臓・腎臓など全身の血管造影や各種の検査を行うことで病気の早期発見や早期治療に繋がっています。また、それまで対応できなかった消化管出血や外傷性出血塞栓に対して経カテーテル的動脈塞栓術も行うようになりましたので緊急症例も増えています。これは当院の診療体制が着実に地域住民の医療ニーズに対応できるようになってきたからだと思います。」と語る池田院長。

「全身の血管造影を行うことは、隠れた血管病変をいち早く見つけることになります。その一例として、ＳＰＰ（皮膚組織灌流圧）検査に異常があった透析患者さんには必ず血管造影を行っています。そして下肢血管病変が見つかった時はＩＶＲを行い血管開存を行うようにしています。この流れを築いてから患者さんのアンプタ（足切断）が殆ど無くなりました。自分の専門性を発揮することが患者さんのＱＯＬの向上に役立っていると確認できて本当に嬉しいですね。」と宮川勝也医師は語る。

高齢化社会における運動の大切さ
予防医療に取組む

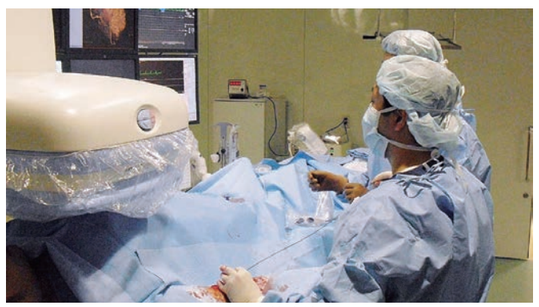
「最近、生活習慣病が引起す血管障害が著しく増えています。こういったことを少しでも減らすために医療機関も予防医療に取組む必要性があると思います。２年前、当グループでは予防医療の一環として“池田メディカルフィットネスセンター”を開設しました。そこでは患者さんや地域住民の生活習慣病の予防・改善のために安全で効果的な運動プログラムを立案し実践指導を行っています。開設１年目は地域住民に運動の必要性を十分に理解させることが出来ず、フィットネスセンターの利用者がなかなか増えなくていっそのこと閉所してしまおうかと考えた時期もありました。しかし、諦めずにいろいろな所へ出かけて行って運動の重要性を訴えたり、敷地内にパン屋を開設するなど地域住民が気軽に通える環境を整えたことが功を奏し、今では施設に入りきれないくらいに利用者が増えたことに大変驚いています。ますます高齢化が進む時代、地域住民に転倒予防や生活習慣病の予防・改善のために運動することの大切さを啓蒙することは重要だと思います。」

「当院では、患者さんや地域住民へ健康情報を提供することを目的に健康生活インフォマガジン“あいことば”を定期的に作成し配付しています。“あいことば”は食事・検査・健康増進などについて分かりやすく説明することをモットーとし、青仁会グループが行っている福祉や介護の情報も掲載しています。」

スタッフの自主性を引出す
人も必要、投資も必要

脳神経外科の富士川浩祥医師は「着任して一番驚いたのは、スタッフが今まで経験したことのない脳卒中の手術サポートをスムーズに行ってくれたことです。」と話す。

「医業経営を行う上でスタッフの対応力を向上させることは絶対に必要な要素です。有能な人材をスカウトすることも大切ですが、育成することがもっと重要だと考えます。当院ではスタッフの自主性を伸ばすためにＱＣ（品質管理）サークル活動を行っています。スタッフは業務改善・患者サービス・医療安全についてチームでテーマを立案し取組んでいます。ＱＣサークル活動はスタッフの成長を促しますし、当院の質の向上や医療安全に結びつくと思っています。」「当グループのスタッフは、この６年間で２００人くらい増えています。スタッフを働きやすくするために福利厚生を充実したり、医療環境の整備に投資することはトップマネジメントの重要な仕事だと思います。高知市の社会医療法人近森会近森病院の理事長近森正幸先生が“良い医療を行うためには人も必要だし投資も必要だ”と言われていましたが、私も全くその通りだと思います。」


ＩＶＲ（血管内治療）

地域医療に責任を持つ
大隅地区で医療を完結する

「昭和３２年、池田医院を開設したのが祖父池田哲男です。青仁会グループの医療の原点は地域医療に取組んだ祖父の姿勢にあると思います。当時、病気の治療方法も確立していない中、祖父は一人でも多くの地域住民の命を守るために昼夜問わず診療に従事していました。その姿は幼かった私にも“地域医療に責任を持つ医師の尊さ”を感じさせました。父池田徹（現理事長）がその姿勢を受け継ぎ、青仁会グループ理念の根幹となっています。」

「勤務医・開業医に関わらず、医師同士が日頃から顔の見える関係を築き診療情報を共有したり互いに切磋琢磨して、その地域で医療を完結するようになれば、一人でも多くの患者さんの命を救うことに繋がります。地域医療に責任を持つには医療機関の連携が不可欠だと思います。」

「当グループではこれまで以上に地域医療に貢献するために５年後には予防・医療・健康・介護・福祉を集約した新たなグループの体制を築きたいと考えています。そうしたことを通じて鹿屋市のまちづくりにも少しでも貢献したいと思います。」

編集後記

長い歴史を持つ病院を改革するにはトップマネジメントの並々ならぬエネルギーと実践力が求められる。

今回、池田大輔院長先生の控えめな物腰からは想像もつかないほどの地域医療に対する熱き思いと行動力を感じた取材であった。

施設名：医療法人 青仁会　池田病院
場　所：鹿児島県鹿屋市下祓川町 1830 番地
ＵＲＬ：http://www.ikeda-hp.com/ikedahp/

取材・編集担当
アイティーアイ株式会社　営業本部　満尾
住　所：福岡市博多区博多駅東 3-1-26
博多駅イーストプレイス４階
ＴＥＬ：092-472-1881

本　社：長崎
支　社：福岡・熊本
支　店：北九州・久留米・佐賀・長崎・佐世保・大村
八代・大分・宮崎・都城・鹿児島・沖縄
営業所：山口・筑豊・五島・天草・延岡・川内・鹿屋
沖縄中部
連絡事務所：東京・東関東・千葉・東京西・神奈川・つくば
川越・木更津・群馬